

## 日独伊三国同盟とソ連邦との関係

清 水 良 三

一

日独伊三国同盟の成立後、一九四〇年一月二六日付のシュレーンブルグソ連駐在ドイツ大使のリッペントロップ外相への電報が、ヒットラーに依って読まれ、同年一二月一八日にバーバロッサ作戦計画の実施が発令されるまでは日独伊三国同盟とソ連邦の間に提携関係が発生する可能性があった。一九四〇年九月一〇日と一一日の両日にわたって行われた東京におけるスターマーと松岡との会談において、スターマーは、ドイツが日ソ関係の調整に対して正しいなる仲買人として働く用意がある、という事を言明し、日本側は当時独ソ不可侵条約が独ソ間にあり、且つ西欧におけるドイツの戦勝に幻惑されていた頃であったし、且つ、近衛内閣総理大臣の考えが、三国同盟を更に四国同盟にまで発展させ、日独伊ソの四国の大陸同盟の力で、米国と交渉しようとするものであったから、それが駐ソ大使をして、独ソ不可侵条約と同型の日ソ不可侵条約を締結せしむべく努力していた松岡外務大臣の考えと合致し、日本はスターマーのこの言葉を信用して四国提携問題のイニシアチブをドイツにとらせることを承知した。元来日独伊三国同

盟は、日独伊防共協定に基ずく三国連携の目的を拡大し、英仏等の諸国までその対象に含ませようとするドイツ側の要望に対し日本がこれに応じないまま一九三九年八月二三日を迎え、そのまま立消えとなっていたものが、第二次欧州大戦勃発後のドイツの華々しい戦果に刺戟されて、ヨーロッパ戦線におけるヒットラー・ドイツ軍の勝利によって其の本国を占領下におかれその政治的地位に動揺を来たしていた東南アジア地域のこれらの敗戦国植民地の豊富な戦略物質に着眼した日本陸軍による日独伊三国提携論を出発点として発生して来たものであるから、日本としては独伊と先ず結んでしまうことが先決問題だったのであり、日ソ関係の調整を一時延期する事に対しては比較的楽観していたものと判断し得る。ところが、独ソ不可侵条約があったにもかかわらず、独ソ間の関係はそれほど平和ではなかった。ドイツが西欧で戦っている間に北欧においてソ連はフィンランドを叩き、バルト三国を併合した。ソ連軍は独ソ国境に集結した。ヒットラーはいずれはソ連と決戦する覚悟を持って居たが、未だ英本国攻襲という大事業が残っていたので、避け得るならば、英国打倒の後まで独ソの衝突を避けたいと考え、対ソ接近に向けて最後の手をうつことになった。一九四〇年一月一日から三日間にわたって行われたモロトフ・ヒットラー・リッペントロップ会谈が即ちそれである。この会谈で日独伊ソ四国提携問題がはじめてドイツ側から提案された。四国提携の基礎条件は、英国の滅亡を前提とした四国に依る地域分配であった。米国は米大陸から一步も出ないという事が第二の重要な基礎条件であるが、これは既に日独伊三国同盟条約に依って基礎的思考として容認されているので問題にされていない。一月一二日のモロトフ・リッペントロップ会谈でリッペントロップは次の様に云っている。

総統はいまソ連、ドイツ、イタリア及び日本の間で非常に概括的な線であっても、勢力圏を相互に確立しておいた方が得策であるとの見解をもっている……………四国が世界において占めている地位から見ても、賢明な政策としては

各国の生活圏の拡大方向を全体として南方に向けるべきこと、日本はすでに南方に向いつつあり、南方において日本が獲得する領土を堅固にするために、日本は今後何世紀か努力しなくてはなるまい。ドイツはその勢力圏問題をソ連との関係においてすでに確定した。従って西欧に新秩序を確立した後で、ドイツもまた南方すなわち旧ドイツ植民地のあった中部アフリカにその生活圏を求めなくてはなるまい。同様にイタリアの拡大も地中海に面するアフリカ、即ち北部及び東部アフリカに向うことになる。思うにソ連も長い目でみればソ連にとって非常に重要な太平洋の自然の進出路を得るため、やはり南方に向けて進出するのではないであらうか。<sup>⑥</sup>

この様に述べた後、ドイツ側はその後のソ連の進出方向として、バツーム・バクーの地域からベルシャ湾アラビア海方面をすすめた。地図を見れば判明する様に、これはヨーロッパ・ロシアから見れば、南方というよりも、寧ろ東南方である。しかるにロシアにとつての緊急の必要地域は東南方というよりも、正しく南方である黒海・トルコ方面、特に海峡地域にあった。日独伊ソ四国の提携問題は、ブルガリア問題・海峡地帯問題ではやくも行詰った。このほかにフィンランドからのドイツ軍の撤退問題がある。ベルリン会談ではモロトフはドイツ側が提案した右の勢力範囲分配の提案に対して直ぐ返答した訳ではない。ドイツ側の説明を「数学の教授の様な」態度できいた後、日独伊ソ四国協定案の内容を概略知った上、返答を後日に期してベルリンを去った。一月一五日の会談でモロトフ外務人民委員がリップントロップ外相からきかされた四国協定案の内容は次の通りである。

三国同盟参加国たる日独伊三国政府およびソ連政府は相互に相接する国境に秩序を確立し、当該四国民の福祉を計るとともにこの目的を達成せんとする四国共通の努力に恒久的かつ確乎たる基礎を与えるため、次の諸条項を協定する。

第一条 一九四〇年九月二七日の三国同盟において、日独伊三国は大戦が世界的抗争とならざるようあらゆる手段によって拡大を防止し、早期世界平和の回復に努力する旨協定し、三国はこの目的を同じうしそのために努力せんとする世界各地の国民との協力を喜んでさらに拡充する意志を表明した。ソ連はここにソ連がこれら目的に同調し政治的に三国と協力してこの目的達成のため努力することを宣言する。

第二条 日独伊およびソ連は相互にその自然的勢力圏を尊重することを約す。これら各勢力圏相互間に折衝の必要が生じた場合、四国は発生せる問題に関し常に友好的に相互会談を開催する。

第三条 日独伊およびソ連は、以上四国中の一国に敵対して結成された列国間における協定には参加せず、かつこれを支持せざることを約す。

四国はあらゆる経済問題に関し、相互に援助し、四国間に現存せる協定を補強拡張する<sup>④</sup>

右の協定案をモロトフに告げた後、リップントロップは更に次の如く述べた。「協定自体は公表される筈であるが、それ以外に上述の協定に関連して秘密協約を締結し——形式は今後決定する——四国の領土的希望の焦点を決定する<sup>④</sup>。そして先に述べた如き方向をソ連に提案したのである。

二

これより先、一月一二日の会談で、モロトフはリップントロップに対し、「欧州及び大東亞圏の新秩序の概念は条約（三国同盟条約のこと）中においても甚だ曖昧であり、少なくとも条約の準備に参加しなかったものにとっては

明瞭ではない。従つてこの概念のさらに正確な定義を得ることは非常に重要であると考える<sup>⑩</sup>と述べて欧州及び大東亜の新秩序の内容を質問したのに対し、リップントロップは、欧州の新秩序の範囲には触れず、大東亜共栄圏について、「大東亜の概念はソ連にとって不可欠な勢力圏に大した関係を持っていない<sup>⑪</sup>」と答えた。モロトフが聞きかたつたのは欧州新秩序の範囲であつた。大東亜共栄圏の範囲については触れないで、モロトフは次の様に述べた。「独ソ間の勢力圏の画定については殊に周到な注意が必要である。これら勢力圏の確立は過去においては部分的な解決しかなされておらず、後で詳細に論議したいフィンランド問題を除いて、これら過去の勢力圏は最近の情勢、事件によつて無効無意味になつてしまつた……ソ連はまずドイツとの諒解を成立させ、その後三国同盟の意義本質目的などに関してさらに正確な情報入手して初めて、日本及びイタリヤと交渉したい<sup>⑫</sup>」。同じく十一月二二日の会談で、ヒットラーは、「ソ連は全然ドイツと利害関係上の衝突を起さずに發展出来る<sup>⑬</sup>」と云いモロトフはこれは正しくその通りである、と賛成した。ところが、フィンランド問題・ブルガリア問題・海峡地帯の基地問題で独逸とソ連は衝突してしまつた。衝突の直接原因になつたのは、一九四〇年一月二六日に駐ソ・ドイツ大使シュレーンブルグがリップントロップ外相にうつた次の電報である（必要部分のみ摘記）。

モロトフは私に今夕訪問するよう要請し来り、デカゾノフ臨席の下に次のように述べた。十一月三日の会談において、政治的提携および相互経済援助に関してドイツ外相が概説した四国協定（前述）に対し、ソ連政府は次の諸条件付きをもつて、これを承認する準備がある。

(一) ドイツ軍は一九三九年の条約によつて、ソ連勢力圏に属するフィンランドから即時撤退すること

(二) 来る数月間以内に、ソ連はダーダネルス海峡におけるソ連の安全を保証するため、地理的にはソ連の黒海安全保障

障地帯に属するブルガリアと相互援助条約を締結し、長期租借により、ボスフォラス及びダーダネルスの圏内にソ連陸海軍基地を設ける

(三) パツーム及びバクーの南から大体ベルシア湾に到る地域はソ連の領土的希望の中心たることを確認する

(四) 日本は北樺太における石炭石油採掘権を放棄する<sup>⑭</sup>

右の中(一)と(二)がヒットラーをして遂に最終的に対ソ攻撃を決意せしめたものである。(三)はベルリン会談で既にドイツ側がソ連にすすめたものであり、(四)はドイツに関係無いことである。先に一月一二日のリップントロップとの会談でモロトフは、「ソ連はまずドイツとの諒解を成立させ、その後三国同盟の意義本質目的などに関してさらに正確な情報を入力して初めて、日本及びイタリヤと交渉したい」と述べている。従って、独ソ交渉が行詰った以上、日独伊三国同盟とソ連邦との提携関係の発生問題はここに終末を告げたと考えられる。

### 三

当時の日本の対外政策は基本的には南方を指向していた。従って北方ソ連との交渉は、南方政策推進の為の補助的な役割を持っていた。強大な陸軍国ドイツがソ連の西方に存在し、しかもドイツ軍が英仏蘭白軍を大陸において撃破していた当時、日本がドイツと提携する事はそれだけで、日本の南方政策推進の為の側面援助を意味した。そして当時の日本の対ソ政策は南方政策推進のために背後の安全を確保することであり、そのため東郷駐ソ大使は日ソ中立条約の締結に努力し、殆んど成功しかかったのである。ドイツ空軍の英本土爆撃直前の一九四〇年八月当時、文字通り

無敵のドイツ軍の精力がヨーロッパ全土に充満するのを見ていたソ連当局が、東郷茂徳駐ソ大使の提案した中立条約締結の議に応じ蔣政権に対する援助中止の条件まで呑もうとしたことは、自然な勢いであった。しかるに松岡の東郷召喚は東郷の時期を得た交渉を中絶せしめたもので、松岡の在外使節大量召喚の投じた最も大きな損失であった。東郷大使帰国の際におけるレセプションはまことに盛会であったが、かかる不必要なる大使交代の為に、日本は日ソ交渉促進の爲の最も好都合の時期を自ら失いつつあったのである。東郷大使の次の建川大使が着任した頃には、ドイツ空軍の英本土爆撃は既に開始せられており、英国の意外に強い抵抗力がソ連側に響いて、ソ連の日ソ交渉に対する態度はやや硬化した。建川新駐ソ大使は一九四〇年一〇月末に、一九三九年の独ソ不可侵条約にならって、それと同型の日ソ不可侵条約を提案した。<sup>⑮</sup>それは極東における日ソの勢力範囲を規定するものであった。この交渉は数月間続いたけれども、何等満足すべき成果は得られなかった。他にも色々理由はあるが、松岡外相のヨーロッパ旅行を推進したのは、建川大使によるこの日ソ交渉の失敗であった。日本側が見誤った点は、独ソ不可侵条約と同型の条約が、極東においても日ソ間に可能であると思ひ込んだ事にある。<sup>⑯</sup>ヨーロッパにおける独ソ不可侵条約は、敵対的なポーランドの分割という果実をもたらした。然し、極東において独ソ不可侵条約と同型の日ソ不可侵条約を締結することは、極東におけるソ連の唯一の味方である蔣政権の支那を犠牲にしなければ出来ないことであつた。<sup>⑰</sup>一九四〇年一月一日に、タス通信は、日本とソ連との間にアジアにおける各々の勢力範囲の境界について了解が成立したという外国新聞の報道を否定し、<sup>⑱</sup>その翌日には日本がロシアに対して、東部シベリアの代りに英領印度を提案したという報道も否定した。又、タスは一月一日に、ソビエト連邦が支那に対してこれ以上援助を与えないという了解を与えたという報道も亦否定した。<sup>⑲</sup>以上のほかに、ソ連政府は英国政府に対して、対支援助を中止する意図のないことを通達した

ことがある。<sup>24)</sup> 汪精衛の南京政府と日本政府との間に日華基本条約が締結された後、日本政府はソビエト政府に対し、この条約中の反共条項はソビエト連邦に向けられたものではない。従ってこの条約は日ソ関係を改善しようとする日本側の希望に何等障害を与えるものではない旨言明した。<sup>25)</sup> ところが其の後、在日ソ連大使スメタニン<sup>26)</sup>は日本政府に対し、「ソビエト政府はソビエト連邦と支那との関係は従来のまま変更せられない旨宣言するのを必要と考える」と到達した。<sup>27)</sup> それから暫くして其の建設に三年を要したロシアから支那への新道路が完成した。この新道路はシベリア鉄道のウランウデから蒙古人民共和国首都ウラン・バートル・ホタに通じ、それから寧夏及び蘭州に至っていた。この道路は戦略上極めて重要な意義を有し、アメリカ物質の輸送に使用する事が出来た。一九四〇年の末までに数千台のトラックがこの道路を利用した。<sup>28)</sup> 一九四〇年一月一日に支那の羊毛とロシアの武器の交換を規定した通商協定の最初の部分が調印された。この協定の後の部分は一九四一年一月に調印された。二月のはじめにはモスコで訓練されていた百五〇人の支那の飛行士が支那に向けて出発した。然しながら、一方においてロシア政府と蔣介石政府との接触を全面的に停止せしめようとする日ソ交渉も徐々に進展しつつあったのである。先にも述べた如く東郷茂徳大使がモスコを去る時開催したグラント・レセプションには、モロトフ、ミコヤン等が出席して盛大であったが東京においては松岡外相が其の返礼に、一〇月革命を記念して開かれたソビエト大使館のレセプションに出席した。又松岡外相は議会において、日ソ両国は相互理解の為の共通の基盤を発見したし、両国関係は極めて良好であると述べた。一九四一年一月二〇日ソビエト政府は日本の漁業権を一年間延長する事を認めた。そして二月には漁業に関する協定の詳細を定める為に特別委員会が任命された。<sup>29)</sup> 又、一九四一年二月には一九四〇年以来中絶していた日ソ通商交渉が再開された。一九四〇年九月三〇日（日独伊三国同盟締結の三日後）プラウダの社説には、「ソ連の中立政策は無変



更であり、かつ其の儘維持されるであらう」<sup>27)</sup>、とあったが、蔣介石政府ならびに日本政府に対するソ連政府の右に述べた如き諸行為は、極東におけるソ連邦の完全なる現状維持政策を証明している。

#### 四

日独伊三国同盟調印をめぐる二つの重要な問題が当時公表されずに終わった。其の第一は日本がドイツに対し、日本が軍事的紛争にまき込まれた場合のソ連の中立の保証を要求したことである。英米両国との戦争の危険性を賭して南方進出の準備に忙がしかった東京政府にとって此の保証は極めて重要なものであった。モスコーに滞在中スターマーは外務人民委員に対してこの問題をとりあげた。これに対しソビエト政府は直ちに其の場合のソ連の中立を約束したのである。其の第二は、三国同盟締結国のいずれか一国が第三国との軍事的紛争にまき込まれた場合、其の第三国が侵略者であるという事は誰が決めるのか、という事であった。例えば、日本はアメリカ合衆国が独伊のいずれか一国又は両国に対して侵略行為に出た場合、独伊側に立って戦う義務があった。然しながら、アメリカ合衆国が侵略国であるかどうかを決定するのは全く日本の自由であったのである。換言すれば、この条約は自動的に其の効力を発するものではなかった。日本はその政治方針を決定する自由を自ら保持していたのである。<sup>28)</sup>

問題の条約第五条には、ロシアが第三国と戦争を開始した場合のロシアに対して何の保証もしていない。概してそれはロシアの利益の保護という点には触れていないのである。それはクレムリンに対し、三国同盟がソ連に対して向けられたものではないという事を保証したに過ぎなかった。調印国の各々はソ連に対して独自の政策を推進する自由

を保持したのである。<sup>29)</sup>それは日本が日ソ中立条約を締結する事を許可し、又ドイツが三国同盟へソ連を勧誘すべく努力することを許可した。又それはドイツが反ソ・ブロック形成の明確な意図をもってロシアの近隣諸国を三国同盟に加入さすべく勧誘する事を可能ならしむるものであった。われわれは先にドイツが三国同盟へソ連を勧誘すべく努力したことや、一九四〇年一月二六日付のシュレーンブルグ駐ソ・ドイツ大使のリッペントロップ宛の電報に言及し、ドイツが三国同盟へソ連を勧誘しようとする意図を放棄した経過について述べた。われわれは次に一九四一年四月一三日の日ソ中立条約について一言した後、ドイツの反ソブロック形成過程について概観したいと思う。

## 五

アメリカ合衆国國務長官コーデル・ハルは、一九四一年四月一三日の日ソ中立条約が出来た時、この中立条約は過去において日ソ両国間に存在して来た状態を其の儘表現したに過ぎないものとしたが、この解釈は大体において妥当であった。当時ソ連は、英米両国からドイツ軍の対ソ攻撃が切迫している、という警告を数度にわたって受けているし、後述する如く、バルカンにおける独ソの角逐は、ユーゴスラビアのクーデターを契機として、益々熾烈の度を加えて来ていたので、ソ連が愈対独戦の近いことを覚悟して、背後の安全を確保しようとした事は自然であった。日本も亦この条約に依って背後の安全を確保しようとしたのである。松岡はベルリンでヒットラーやリッペントロップに会った時、彼等から独ソ関係の危機について説明されたが、ドイツのソ連攻撃計画については知らされなかった。その為、松岡は日本の対外政策の基本的な南方指向性に対して何等の疑問も持たなかった。日独伊三国同盟は日独伊三

国とソ連邦との関係の静態を予定し、又は日独伊ソ四国の提携関係の発生を予定して結ばれた対英米の同盟であつて、日独伊三国とソ連邦との関係については、強いて触れる事を避けている。日独伊三国同盟条約第五条の意味は、日独伊三国が対英米問題の解決と対ソ問題の解決との間に時間的な差をつけたことにある。日本もドイツも、先ず最初に英米問題が解決され、次いでソ連問題が解決されるものと期待していた。この中間策として日独伊ソ四国提携問題があつたが、これは先にも述べた通り実現しなかつたので、一九四〇年一月一八日以後、日独両国の三国同盟に対する解釈は分離して来た。即ち、日本は未だヒットラーの秘密計画を知らないもので、日独伊三国同盟を締結当時と同様に、ソ連邦との関係の静態、又日独伊ソ四国提携関係の発生を前提として此の条約を理解していたのに対し、ドイツは既にソ連邦との関係に関するこのいずれの前提をも否定していた。その為一方においてドイツが着々として反ソプロックを形成しつつある間に、松岡は翌年四月のドイツ訪問の往路モスコに立ち寄つた時に、日独伊ソ四国協商家案<sup>⑩</sup>とでも称すべきものをソ連側に提案した。勿論これは実現しなかつたので、帰途モスコに立ち寄つた時に、ソ連邦との関係の静態を条文化したのである。これは東郷大使以来の伝統の対ソ政策が、独ソ関係の危機切迫という客観状勢に助けられて既に結晶していたものを、松岡が中立条約と銘うって発表したものである。これに依つて日ソ関係が改めて改善された訳ではない。日ソ中立条約に依つて日本は北方の軍備をゆるめることも出来ず、北樺太の利権の譲渡を約束させられた。これに依つて得をしたのは、日本ではなくソ連であつた。この条約に依つてソ連はヒットラーが西方において何をしようとも、東方から攻撃を受けることはないという保証を得た。<sup>⑪</sup>日本はこの条約に依つて従来の南方政策推進を再確認した。即ち、日本はいぜんとして日独伊三国同盟に対する従来の理解を変更せず、締結当時と同じく、対英米問題の解決と対ソ問題の解決との間に時間的な差をつけ、南方政策の推進に必然相伴う対英米問題

の解決を先にしたのである。しかるにドイツは二月一八日以後は対ソ問題の解決を先にしてゐる。このことは既に三国同盟が實質的には分裂を開始したことを意味する。かくして理解出来る如く、日独伊三国同盟条約第五条は日独伊三国同盟にとっての鬼門であつた。それは締結国に対ソ関係を改善することや、対ソ関係の静態を維持することを許可した。しかしそれは締結国に対ソ関係を悪化せしむる事をも許可したのである。従つてたとえば樞軸の一国がロシアに戦争を挑むことは少しも差支えなかつたのである。ドイツは日本に相談する事なしに対ソ問題の解決を対英米問題の解決よりも先にした。日本はそれを知らなかつたから従来通りの三国同盟の解釈をそのまま押し行つて、日ソ中立条約を締結した。

当時の四国の状況と松岡外相一行のモスコウ出発をスターリン自身歓送に出たという事実に依つて、ソ連がこの条約に重要な価値を与えていたことがわかる。一九四一年四月一五日のイズヴェスチアはこの条約を次の如く論評した。

「四月一三日モスコウにおいて調印された公文書は単に平和の増進に役立つのみではなく日ソ兩國の偉大な国民の間に真に良好なる善隣友好の道を開くものである。ソ連及び日本の歴史的発展の方向は兩國間のこの様な関係を要求している。これら二大國間の敵対関係は夫々が夫々に課している仕事の実現をさまたげるのみである。種々な歴史的段階において種々の第三國がこの兩國間の敵対関係を助長し、且つこれを促進せんとしたのは偶然ではないのである。数え切れない程の多くの困難な経験を経た後、ソ日関係は新しい段階に直面しつつあり、それは必ずや良き成果をもたらすことであらう」<sup>②</sup>

一九四一年四月一六日にソ連駐在ドイツ代理大使ティッペルスキルヒが、ドイツ外務省にうつた電報には

「モスクワの日本大使館では日ソ中立条約が日本ばかりでなく枢軸国にも有利であり、枢軸国にたいするソ連の關係がこれに依つて好転するであらうし、又ソ連は枢軸国との協力を留意しているとの見解を抱いている」とある。<sup>⑧</sup>

又、この四月一六日はモロトフが日ソ間の通商条約に関する交渉を継続するために、日本大使の来訪を要請して来た日である。日本大使はこの事実を日ソ關係進展の大きな証拠である、と見なした。英米側はこの条約の価値を小さく見なそうとしたが、四月一九日のプラウダはこれに答え、ソ連が外部事情に影響されることなしに、独立独歩に其の政策を遂行出来る時機が到来したことを指摘した。<sup>⑨</sup>そしてそれと同時に、一九四〇年一月に日本が提案した日ソ不可侵条約と同型の日ソ不可侵条約案をとりあげなかったこと、及び同年一月にはソ連が三国同盟との提携を拒絶したことがはじめて明らかにされた。即ち、これに依つてソ連邦の政策は日独伊三国同盟とは別箇のものであること、蔣政権に対する關係は不変であり、極東における日本との關係は必要以上に親密化される事を好まないことが明瞭にされた。ソ連は伝統の中立政策に還元することを得たのである。当時延安で発行された一パンフレットは新条約をもつて、ソビエト平和政策の勝利であるとし、これに依つて極東戦線は安定したと述べた。<sup>⑩</sup>一九四一年五月一日の演説でチモンエンコは、ソ連の平和政策は不変であり、あらゆる隣国との友好關係の維持に努めているけれども、ソ連は資本主義諸国の包囲を受けているので、吾々はあらゆる可能性に備えなければならない、と述べた。<sup>⑪</sup>この演説はソ連外交の原則を繰り返しただけで、何等新しいものを含んでいないが、四月一九日のプラウダが三国同盟に対するソ連の提携拒絶、及び日ソ不可侵条約と同型の日ソ不可侵の拒絶を發表した後であることに其の意義がある。ソ連はあらゆる準備を整えて、資本主義国間に戦争が起るのを待つことになった。独逸のソ連攻撃の気配が極めて濃厚になった当時においてすら、アングロサクソン諸国との關係を改善すべき何等の努力も為されなかった。日ソ条約成立後

米ソ関係は悪化し、米国のソ連に対する物質の供給は減少したし、四月一日に開かれたマイスキーとイーデンとの交渉においても、ソ連はバルチック諸国に関する問題で何等の譲歩も示さなかった。従ってソ連が日独伊三国同盟との提携を拒絶して独逸との対立を容認したのは、斯くすることに依ってあらかじめ米英の援助を期待したのではない。ソ連独自の力に依ってドイツとの対決を自覚したのであり、四月一三日の条約はこの自覚を明確ならしめた。リッベントロップがこの条約の成立に不快の念を表現したことは自然である。

## 六

われわれは次にドイツの反ソブロック形成過程を概観しよう。既に述べた如く、日独伊三国同盟とのソ連の提携に關し、一九四〇年一月のベルリン会談で、ドイツはソ連の進出方向をバツーム・バクーよりバルシャ湾方面に向けようとしたが、ソ連はそれだけでは承知せず、両海峡地帯に陸海軍基地を設けることやブルガリアと相互援助条約を締結することを主張した。ソビエト連邦はバルチックにおいてと同じくバルカンにおいてもヨーロッパの国家としてとどまらんとした。<sup>⑨</sup>ドイツはソ連を中央アジア的な国家たらしめようとした。こうしてドイツとソ連は対立したので、ドイツはその後是对ソ包囲陣を完成しようとした。一九四〇年一月二〇日にハンガリーが、次いで二三日にルーマニアが、二四日にスロバキアが日独伊三国同盟に加入した。一九四一年三月一日にはブルガリアが六月一五日にはクロアチアが日独伊三国同盟に加入した。ドイツは日独伊三国同盟条約第五条を利用して、表面上ソ連に対する非友誼的な行為という口実をソ連に得られることなしに、対ソ包囲陣を徐々に完成して行ったのである。ドイツの対ソ

包囲政策は単にバルカンにおいてのみ行われたのではないことは勿論だが、独ソの勢力争いが最も烈しかったバルカンにおける政情を回顧することは、当時の独ソ関係を理解するのに第一次的に必要なことなので、バルカンにおける独ソの角逐について概略を記述することにする。

ドイツが西欧での戦争を準備し且つ戦っている間に、ソ連はフィンランドの一部（カレリア地峡・ヴィブリ湾・ラゴダ湖・カンダラクシャ地方の一部・リバチ及びスレドニア半島の一部・フィンランド湾内の多数の島）を獲得し、エストニア・ラトヴィア・リシアの三国を事実上その支配下におさめた。次いでロシアはベッサラビアの回復に乗り出した。ベッサラビアは帝制ロシア領であった。それを革命後の弱体政府時代、ルーマニアに奪取せられた。それ故ロシアはこれを奪回せんとしていた。ロシアがこの地方を奪回せんとしたのは、以上の理由のほかに、南東ヨーロッパに対するイタリアの野心に対抗せんがためであった。イタリアは当時において、ロシアに対して最も敵対的な国家であった。一九四〇年三月二九日、最高ソビエト会議における演説で、モロトフは次の如く述べた。「ロシアの南部に近接する国家の中で、ルーマニアは我々との間に不侵略条約を持っていない国家である。それは何故かと云えば、ベッサラビア問題が残っているからであり、ルーマニアのベッサラビア獲得をソビエト連邦は未だかつて認めないからである。」<sup>④</sup>この言明はドイツを困惑せしめた。何故ならばこの言明は、当時ソビエトの外交官がアンカラにおいてユーゴスラビア代表と協議しつつあったという事実と合致して、イタリアに対するソ連の間接的な態度表明にはかならなかつたからである。当時トルコとギリシャは英仏陣営にあり、ブルガリアだけがソ連と友好関係にあった。問題はユーゴスラヴィアの態度であった。はじめユーゴはフランス陣営にあったが、一九三八年三月ドイツがオーストリアを併合し、ハンガリーがドイツ陣営に入り、チェッコスロヴァキアがドイツに占領せられては後、ユー

ゴの外交政策も当然変更を余儀なくせられた。ユーゴはそれまでチェッコスロヴァキアやルーマニアやポーランドとの協調外交に依存していたが、ポーランドとチェッコスロヴァキアは既に存在していなかった。<sup>④①</sup>ルーマニアの援助は期待出来なかつた。フランスは自己の軍事問題に没頭していた。かくてユーゴはソ連の援助を求むべく決意した。<sup>④②</sup>一九四〇年五月一日、ソ連とユーゴスラヴィアとの間に通商協定が締結された。ユーゴもソ連もイタリアを刺戟し過ぎることを恐れて、この協定が通商協定であることを言明した。イタリアの新聞もドイツの新聞も衝突が表面化することを恐れて、ソ連とユーゴスラヴィアとの接近を承認した。然しながら、この協定が明らかにイタリアに対抗しているものであることは、何人にも明らかであつた。イタリアとユーゴスラヴィアとの関係は極度に悪化した。チアノ日記によれば、ムッソリーニは八月六日に、九月一〇日と二〇日の間にユーゴスラヴィアを攻撃しようと語つた。<sup>④③</sup>然しながら、ユーゴスラヴィアに対する攻撃計画はドイツの反対に依つて放棄しなければならなくなつた。チアノは一九四〇年八月一七日の日記に、「それは全く中止するよりほかにどうにも仕様がなかつた」と書いている。<sup>④④</sup>一九四〇年九月一九日に、リップントロップ独逸外相はムッソリーニ・イタリア首相に対し、今後のロシアの行動で、ブルガリア又はユーゴスラヴィアに対するロシアの勢力を増大させる傾向があつたり、又はロシアのボスフォラスへの接近の傾向があるものは、ドイツの見解と全く相容れないものである、と言明した。然し、ギリシャとユーゴスラヴィアに関しては、「全くイタリアの利益に関することであり、イタリアのみがその解決策を選択する権限がある」と語つたのである。<sup>④⑤</sup>バルカンにおいてドイツはイタリアとロシアとの間の勢力均衡を維持しようと努力した。ドイツはユーゴスラヴィアの独立を脅かす意図のない事を屢言したばかりでなく、逆に以前からの協定に従つて、ユーゴスラヴィアに武器を送り込んでいた。<sup>④⑥</sup>ユーゴスラヴィアは五月のはじめまでに三〇万の軍隊を動員し、そのうち一五万が独



伊国境に集結された。<sup>47</sup> イタリアがはじめにフランス攻撃に出るかバルカン攻撃に出るかの分岐点に來たが、六月一日にイタリアはドイツ側に立ってフランスを攻撃した。

## 七

ドイツが西欧で全力をあげて戦い、イタリアがこれに参加し、ソ連はバルト海沿岸の工作に多忙となり、バルカンには一時平和が訪れたが、西欧における大勝に元気づけられてドイツはバルカンにおいて間接侵略を開始した。

小アンタント<sup>48</sup>が崩壊しても、ルーマニアはユーゴスラヴィアやブルガリアがやった様に、ソ連に援助を求めぬ訳にはいかなかった。何故ならば、ソ連はベッサラビアを欲していたからである。ルーマニアはやむを得ず、ドイツ陣営に入った。六月の末までにドイツはルーマニアに支配権を確立したが、軍隊は未だ進駐していなかった。ソビエト・ロシアはルーマニアがドイツ軍に占領されてしまつてからでは、ベッサラビアの無血獲得は不可能であると思ひ、ドイツとの戦争を避けつつ、しかもその領土的欲望を満足させんが為に、ルーマニア政府に対してベッサラビアの割譲を要求し、六月二八日（一九四〇年）に有無を云わさずベッサラビアを占領、更に北ブコヴィナも占領した。<sup>49</sup> ドイツは直ちにルーマニア領ブラソフ飛行場に大型の爆撃機を着陸させ、ソ連のそれ以上の領土拡張を完封した。<sup>50</sup> ルーマニア政府は一九四〇年七月一日に、英仏に依るルーマニア国境の保障を廃棄し、七月四日、ルーマニア政府のそれ以後の外交政策は、ローマ・ベルリン枢軸の政策に依つて指導される旨発表した。ルーマニアには英仏勢力が残存していたので、独逸はルーマニアに対する軍事的進出を、対英仏のものとして定義し得たし、ソ連はベッサラビアの歴史を

回顧して、ベッサラビアの併合を定義づけることが出来た。独ソ両国とも未だ戦う意志はなく、相手国の勢力拡張に對抗して慎重な手段に出た。

一九四〇年八月三〇日、ドイツのリップントロップ外相はウィーンでイタリアのチアノ伯と会見、ハンガリーとルーマニア間の国境紛争を妥結せしむべく協議した。この会見にはルーマニア外相マノイレスコ及びハンガリー外相チャキが招待されてこれに参加している。この会見の結果、ルーマニアはハンガリーにトランシルヴァニアの北半分を割譲する事になった。モロトフ・ソ連外務人民委員は、ドイツのこのハンガリー・ルーマニア国境紛争の調停を、独ソ不可侵条約の協議条項の違反であるとした。<sup>⑤</sup>この割譲に依ってハンガリーはその面積四万四千平方キロメートル、人口約二百万の土地を得たのである。それまで徐々に枢軸陣営に接近しつつあったハンガリーは、この思恵を受けて、今や全く独伊枢軸陣営に入ることになった。斯くて枢軸陣営は戦略的な見地から重要な進歩をなし遂げるに至った。東方における領土的拡張の結果、ハンガリーは今や広い面においてソ連とその国境を接するに至った。先にベッサラビア及び北ブコヴィナを失い、今またトランシルヴァニアの北半分を失い、しかもドブルジャをブルガリアに奪取される危険に晒されつつあったルーマニアは、既に弱小国家になりさがってしまったが、しかも猶お、ルーマニアはドイツにとって戦略的に重要な国であった。ドイツとイタリアはルーマニアがこれ以上ロシアに割譲されることを好まず、又、ルーマニア領を通じてソ連とブルガリアとの間に接触が生まれるのを好まなかった。かくて、ドイツとイタリアはルーマニアの国境を現状のまま維持せんとする決意をしたのである。チアノは一九四〇年八月三〇日、ルーマニアのマノイレスコ外相に対し、イタリアとドイツは今日ルーマニア国家の領土を保全し、その不可侵を保障すべく決意した旨を通告した。<sup>⑥</sup>この保障は新たに確立されたハンガリーとの国境及びブルガリアとの国境に適用

されるばかりでなく、ソビエト・ロシアとの国境に適用されるものであった。ドイツはその密約において、ルーマニアに対する軍事援助を約し、あらゆる可能性に備えて自動的に独逸の軍事援助が発動されるものとしたのである。チアノの通告を受けてから二日の後、ルーマニアの外相ミハイル・マノイレスコはラジオを通じて次の如く述べた。

「此の保障によって、我々と枢軸国との結着は解き難きものとなった。今後我々の政策は枢軸国の政策と同じ道をとるよりほかに道はない」<sup>53)</sup>

ヒットラーは一九四〇年一〇月一日、ルーマニアの油田を英国のサポタージュから保護する為という口実の下に、国防軍に対してルーマニアの占領を命じた。<sup>54)</sup> かくてドイツはルーマニア内に軍隊を駐在させると共に、ルーマニアの軍隊を監視し、且つ之を指導することになった。このドイツ軍の行動は明らかにロシアに対抗し、ロシアを目的にしてとられたものであった。南東ヨーロッパは今や独ソ戦近しとの予感にふるえた。<sup>55)</sup> ハンガリーは近づきつつある危機に対して最も敏感であった。何故ならば、ハンガリーは独ソ開戦の場合に自分が何を為さねばならないかをよく知っていたからである。一九四一年一月一日までに数拾万のドイツ軍がルーマニア内に集結された。ドイツはそればかりでなく、二つの飛行機工場を建設しはじめたし、ガラツツ港に潜水艦基地を建設しはじめた。<sup>56)</sup> ルーマニアはドイツ軍基地の覬を呈するに至り、ロシアとルーマニアの関係は極度に悪化するに至った。一九四一年二月二日、イギリスはブカレストからその外交代表をひきあげ、イギリスとルーマニア間の外交関係はここに断絶した。ソビエトの使節は何もしなかつたけれど、いぜんとしてブカレストに在任していた。<sup>57)</sup>

## 八

ヨーロッパに関する限り、日独伊三国同盟は完全にドイツに従属している軍事的ブロック以外の何ものでもなかったのである。然しながら、スターリンはドイツとの正面衝突を好まなかったので、三国同盟に対しては、それまでモロトフがとっていた政策をその儘継続させ、ドイツの三国同盟への招請を拒絶することはしたが、ドイツ一国との友好関係はあくまで維持しようとするのである。ヒットラーはソ連を自己の軍事的ブロックに導入することに依って、イギリスに対して、自己の不敗の態勢を誇示しようと思っていた。枢軸国は新しい外交上の勝利によって、世界を驚かそうとしたのである。然しながら、この問題に関しては、モロトフは沈黙したままであった。モロトフがベルリンにいた時行われたレセプションには日本の代表もイタリーの代表も招待されていなかったし、出席もしなかったのである。斯くして、ソビエト政府はソビエト連邦が日独伊三国同盟と提携しないという事は、独ソ親善関係の維持とは別個の問題であることを強調しようとしたのであった。<sup>⑤⑧</sup>モロトフはまたベルリンにおいて数多くの問題を取りあげた。彼はヒットラーに対して、ドイツのルーマニアに対する領土の保全とその不可侵の保障について、それはロシアに対して行われたものなのか、と尋ねた。この質問に対するヒットラーの答は回避的であった。更にモロトフはブルガリア問題を取りあげ、ブルガリアがソビエトの勢力圏内にあることをドイツに知らせようとしたが、ヒットラーはそれを聞こうとはせず、一体ブルガリアはソ連の保護を求めているのか、と尋ねた。<sup>⑤⑨</sup>そしてブルガリアがソ連の勢力圏内にあるということを承認しなかった。一九四〇年一月のモロトフの訪独直後、ブルガリアのボリス国王がヒッ

トラーに招待されて、ヒットラーと会見したことは意義深い事である。

ドイツのバルカンにおける活動が盛んになるにつれて、ギリシャとトルコが問題の地域になって来たが、この時、ソ連はドイツに甘言を弄し、ギリシャもエーゲ海域もソビエトの勢力圏には入っていない旨を言明し、それと同時にダーダネルス及び黒海沿岸諸国の現状維持を主張したのである。<sup>⑥</sup>近東、特にトルコにおけるソ連勢力を最小限にとどめておこうとしていたヒットラーは、ソ連側のこの見解を受諾しようとはしなかった。

一九四一年一月のベルリン会談は失敗に終わったというのが適当であろう。斯くて失敗に終わったベルリン会談の反動として、ドイツは反ソビエト同盟の形成に努力を傾注することになるのである。これらの大体の経過については前述したが、かくしてベルリン会談以後に於ては（更に正確に云えば一九四〇年一月二六日以後においては）ソ連はドイツにとって、仲間又は仲間となり得る国家ではなくて、はっきりした対抗勢力となった。ロシアが提携すること拒絶した日独伊三国同盟は、あらゆる反ソビエト勢力を結集するのに便利な手段であった。ロシア周辺のあらゆる小国は此の三国同盟条約があった為に、特に同盟条約第五条があるために反ソビエト同盟を形成しつつあるのだという非難をまぬがれることが出来たのである。

一つ、又一つとロシア周辺の小国はこの三国同盟条約に調印させられた。一九四〇年一月二〇日、ヒットラー、リップントロップ、チアノ等がウイーンに集合し、ハンガリーの三国同盟加入を受諾した。ハンガリー首相テレキは調印にあたって、特に三国同盟条約第五条に言及し、ソビエト・ロシアに対する友好のゼスチャーを示した。彼は、ドイツ・イタリーが日本とこの同盟条約を締結したのは、「国際的正義に立脚した平和を確保せんが為であり、ハンガリーはその歴史的発展の権利を尊重するその隣国との友好関係を維持せん事を目標にしている。ハンガリー政府は

特に三国同盟条約の第五条に満足を感じるものである」と述べた。<sup>61</sup>然しながら、それから三日後、ルーマニアのアントネスコ首相がベルリンにおいて此の同盟条約の参加議定書に調印する時、彼は故意か偶然か、同盟条約第五条に言及しなかった。一九四〇年一月二四日にはスロヴァキアが三国同盟に加入した。

ドイツの新聞はハンガリーの三国同盟加入はあらかじめソビエト・ロシアの承認を得て行われたものである、と述べて、ソビエト・ロシアに対して気味の悪い友情の押売を行った。モスコフは直ちにこれを否定した。然しながら、ソビエト政府はただ否定しただけでなくドイツとの間に友好関係が円満に継続中である旨を強調することを忘れなかった。この時ソビエト政府は、ポーランドにおける独ソ国境決定のための混合委員会について言及した。「約九ヶ月間、両国は友好裡に活動して来た。そして境界線の劃定は最終的に決定された」とその混合委員会の報告は述べている。

日独伊三国同盟条約は多くの点において、事実上反コミンテルン条約の拡張であった。世界的規模の観点から云えば、三国同盟条約はロシアに対して中立を維持しながら、第一次的にはアメリカ合衆国を目標につくられたものであった。然しながら、ヨーロッパの観点から行けば、その銚先は一九四〇年一月二六日以後ソビエト・ロシアに向けられていたものである。一九三九年八月二三日の独ソ不可侵条約は、ソ連に対するドイツの警戒心を一時ゆるめたと過ぎず、又同盟条約第五条はソ連に対するドイツの行動に何等の制約も与え得なかった。

## 九

ブルガリアは第二次欧州大戦勃発の当初からソビエト陣営に属するものと見られていたが、ドイツはブルガリアを

自陣営に参加せしむべく努力した。一九四〇年後半の独逸の努力は主としてこの点にかけられたのである。ブルガリアはトルコへ通ずる道である。若しもトルコが三国同盟に参加するならば、或いは又、三国同盟に参加せずとも、トルコ領内のドイツ軍の通過を許可するならば、ヒットラーの対ソ包囲の計画は完成するであろう。かりにドイツ軍が小アジアの飛行場を使用出来る様になったとしたら、ドイツ軍は南方からカスピ海に到着することが出来るし、バクーに対して直接破壊攻撃に出ることが出来る。従って、トルコへの道ブルガリアに対しては、ソ連も亦外交上の努力を払うのである。ソビエト政府は、ルーマニア領ドブルジャに対するブルガリアの要求を大いに支持した。一九四〇年八月一三日には、プラウダ紙もイズヴェスチャ紙も、ドブルジャに対するブルガリアの要求を支持した。ソビエト政府は、若しもドブルジャがブルガリアに返還されるならば、それはドイツやイタリーの支持に依るものではなくて、ロシアのルーマニアに対する圧迫に依るものである、という事を理解せしめようとしたのである。ソ連は明らかに、独伊の力に依って、ドブルジャ問題が解決されることを好まなかった。ところがハンガリーがルーマニアから北トランシルヴァニアを獲得してから一週間後、ルーマニアはドイツの圧迫を受けて南ドブルジャをブルガリアに譲渡することを同意した。これはロシアの勢力圏にあったブルガリアに対する独伊側の最初の大きな勝利であった。ドイツとイタリーのブルガリアに対する圧迫は日と共に強まって行った。そしてロシアの南東ヨーロッパに対する勢力は急速に落下して行ったのである。ブルガリアの人民は元来ロシア好きであった。③④ 彼等は南東ヨーロッパにおいてソビエト・ロシアがドイツの勢力に對抗し得ることを信じていたが、右の事実によって、この彼等の信念は地におちた。ソフィアにおけるソ連代表の役目は単なるオプザーヴァーに過ぎなくなりました。④⑤ それでもドイツは未だその軍事作戦に対するブルガリアの直接参加を要求してはいなかった。ただドイツ軍がブルガリア領を通過することに對する

同意とその協力を求めたに過ぎなかった。ブルガリアの人民の大部分が反独的であったので、ドイツはその事に考慮を払って、ブルガリア軍の軍事的協力は求めなかったのである。ドイツはブルガリアに対し、枢軸国の軍事作戦がバルカンで行われる場合にも、ドイツはブルガリアがその隣国を攻撃することを期待してはいないと告げていた。その代りドイツ軍のブルガリア領通過許可、ドイツ軍の側面防禦、及びドイツ軍に対する反撃の撃退を期待すると告げていた。<sup>65</sup>ブルガリアをめぐる裏面の闘争は一九四〇年一月、ドイツがブルガリアの三国同盟参加を要求した時その頂点に達した。枢軸国の目的は、ブルガリアの関心をルーマニア及びソビエトロシアからそらせて、イタリーが戦争しているギリシャの方へ向けることにあった。三国同盟へ参加すれば、ブルガリアはギリシャの犠牲において、エーゲ海への出口を与えられることになっていた。この計画に対して、ソフィアにおいて多くの賛成の声が聞かれた。然しながら、ブルガリアに対するロシアの圧迫はいぜんとして続けられていた、ロシアはブルガリアが三国同盟に参加しないよう、努力した。

モロトフがベルリンを去ってから三日後、ブルガリアの国王ボリスはヒットラー直々の招待を受けてベルリンを訪問した。この会談の主要論題はブルガリアの日独伊三国同盟加入の件であった。ヒットラーの計画では、ハンガリー、ルーマニア、スロヴァキアと一諸にブルガリアを三国同盟に加入させる筈であった。ボリス国王は躊躇して決しなかつた。彼はその拒絶の理由として多くのことをあげたが、その中で最も重要なものは、ブルガリア内におけるロシアの影響であった。<sup>66</sup>ブルガリアが公然と三国同盟に加入するならば、ブルガリアは動揺せざるを得ないであろう。その妥協として、ブルガリアはその精神においてバルカン的な一協定を受諾した。独ソの対立に対しては、完全に中立的な外交政策を維持しながら、ブルガリアはバルカン地方における枢軸国の要求に応ずる事を受諾した。ブルガリ



アの三国同盟に対する正式の参加は、ブルガリアの輿論が、その様なブルガリア政府の行動を容認する様になった時に、はじめて行われる事になった。ヒットラーに対する誠意を披瀝する為に、ボリスは反ユダヤ立法を行う事を約束した。然しながら、ブルガリアは英国・ロシアに対しても、友好的な態度を表示する事を忘れなかった。ブルガリアは完全中立を維持せんが為非常に努力をしたのである。ボリス国王がソフィアに帰ると、ソ連大使ソボレフはボリスと会見し、ブルガリアとドイツとの接近に不快の念を表現したが、ボリス及び外務大臣ポポフは独ソ関係に関しては、ブルガリアは厳正中立を維持する旨保証した。<sup>67</sup>そして、一九四〇年二月末になると、ブルガリアの陸軍大臣は、ブルガリア軍は厳正中立を維持し得るほど、充分に強力である旨言明した。

一九四一年一月一二日、モロトフはタス通信を通じて、ブルガリア問題に関する次の如きロシア政府の見解を発表したが、それはドイツに対するよりも、むしろブルガリアに対して行われたものであった。

(1) 若しも、ドイツ軍隊が実際にブルガリア内にあり、猶ほブルガリア内に継続的に進入しつつあるならば、ドイツは未だ曾てブルガリア内におけるかかる軍隊の駐在及びその軍隊の通過をソビエト連邦に通過したことはないから、これらの行為はソビエト連邦のあらかじめの承認又は同意なくして行われたものである。

(2) ブルガリア政府は、ドイツ軍隊がブルガリア領を通過する事を許可する問題について、決してソビエト連邦と相談しなかった。そしてそれ故に、いかなる種類の返答もソビエト連邦から受けることは出来なかった。<sup>68</sup>

右のコミュニケの重大な意義は、ソ連がドイツに対して、ドイツがブルガリア問題に関してソ連と討議しなかったことを、暗黒のうちに非難したところにある。一九三九年の独ソ不可侵条約によれば、ドイツはブルガリア問題に関して、ソ連と討議せねばならなかった。ロシアから拒絶の回答が来ることを恐れて、ヒットラーはむしろ此の条約の討

議条項を無視することを選んだのである。ドイツによる独ソ不可侵条約の討議条項の違反は明白なものであったにもかかわらず、ロシアはこれを間接的にドイツ側に知らせるに過ぎず、ブルガリアに対して抗議を行なうという形式をとった。そればかりでなく、ソ連はドイツに対するこの間接的な抗議すらも、あまりにもドイツを刺戟することを恐れ、且つ独ソ友好関係の仮構を維持しようとして、ソビエトの新聞は突如として独ソ両国間の経済及び通商協定で、それまでに発表されていなかったものを発表した。<sup>⑨</sup>

ブルガリアはその領土内にドイツ軍隊が存在することを正式に否定した。フィロフ首相はその演説で、いかなる状況の下においてもブルガリアは、その領土内に外国軍隊の駐在を許可せざる旨を繰り返した。然しながら、ソヴェトのブルガリアに対する勢威は殆んどゼロの点まで下ってしまった。ドイツは今やその目的達成の為に、武器に訴える用意すらある事をかくそうともしなかった。ソ連の抗議はそれが直接に軍事行動の擁護を背後に持っている時のみ威力があったが、それが単なる外交である時には効果はなかった。従ってソ連が武器を使用しようとしな限り、ドイツの勝利は確実であった。一方ドイツは大量の軍需物資をブルガリア領を通じて、ユーゴスラヴィアの国境にまで輸送しつつあった。公式にはベルリンは独逸の軍隊がブルガリアに侵入しつづけているという事を否定していたが、数千のドイツの「旅行者」がブルガリアのいたる所で飛行場を建設したり、舟橋をつくったりして、ドイツ軍の進撃の為のあらゆる準備をなしつつあった。<sup>⑩</sup> また此の頃ブルガリアはドイツに接近するもう一つの重要な行動をとった。即ち、一九四一年二月一七日に、ブルガリアはトルコとの間に不可侵条約を締結した。この条約の意図は明白であった。それはドイツ軍がブルガリアに軍事行動を起した場合、トルコがドイツ・ブルガリア間の軍事的紛争に介入する事をあらかじめ防止するものであった。モスコはタス通信を通じて、トルコ・ブルガリア間の不可侵条約

がソビエト連邦の働きかけによって締結されたものであるというスイスの新聞パーゼラー・ナハリヒテンの報道が、事実根拠を持っていない旨を述べた。又、この頃になると、ドイツは愈公然たる行為に出て来た。ドイツはブルガリアが、日独伊三国同盟に公然と参加する事を要求したのである。一九四一年三月一日にブルガリアのフィロフ首相は、ウィーンにおいて三国同盟条約加盟議定書に調印した。この時、リップントロップは明らかにユーゴスラヴィアに言及しつつ次の如く語った。「暫て更に多くの国がこの同盟に参加するであろう」。フィロフは次の如く述べた、「ブルガリアはソビエト・ロシアとの友好関係を継続し、更にこれを発展させる事を目標にしている」と。フィロフが三国同盟の加盟議定書に調印してから二時間後、ドイツの機械化部隊はブルガリアの国境を越えた。それから二日後、ソビエト政府は次の如く言明した。

先ず、ソビエト政府はブルガリア政府がこの問題においてとった立場の正当性に関するブルガリア政府の見解に同意出来ない。何故ならば、ブルガリア政府の希望にもかかわらず、ブルガリア政府がとった立場は平和の促進を導かざるのみならず、戦争範囲を拡大せしめ、ブルガリアを戦争にまき込ませるからである。

第二に、この見解からして平和政策に忠実なるソビエト政府は、ブルガリア政府の現政策遂行を支持することは出来ない<sup>⑫</sup>。

ドイツの外務省は、このソビエト政府の言明について、「ロシアは中立国であるからその見解は明白である」と述べた。<sup>⑬</sup>

一方、ブルガリアと英国の関係は極度に悪化した。二月二八日に英国はブルガリアに対し、若しもドイツの技術者や「旅行家」がブルガリアに入るのを禁止されないのならば、英国はブルガリアとの外交関係を断絶せざるを得ない

だろ」と述べたが、ブルガリアはこの英国の警告を無視した。三月五日、英国はブルガリアとの外交関係を断絶した。ブルガリアにおけるソ連と英国の立場は似ていたけれども、両国はブルガリアにおける闘争で協力しなかった。ソビエト政府は消極的ではあったけれども、ブルガリアとの外交関係は従来のまま維持した。<sup>④</sup>

ブルガリアのボリス国王が三国同盟に加入する事を決意した理由には、大体次の三つのものが考えられる。<sup>⑤</sup>先ず貿易面について見ると、一九四〇年までにドイツはブルガリアの輸出の殆んど六〇パーセントを占め、その輸入の約七〇パーセントを占めていた。又ドイツはブルガリアの鉱業、特に銅・鉛・亜鉛の開発に積極的であった。又、ドイツはブルガリア内に道路を建設するのを支援し、イタリーはブルガリアがレーヨンや綿の工場を建設する事をたすけた。第二の理由として考えられるのは、ドイツの援助に依るブルガリアの領土拡張である。ドイツはルーマニアを圧迫してブルガリアに対して二八〇〇平方哩に及ぶドブルジャ地方を割譲せしめた。又、ヒットラーはユーゴスラヴィア及びギリシャに進撃した際、ブルガリアがユーゴスラヴィア内のマケドニア地方及びギリシャのスラシアン地方を占領するのを助けた。第三の理由として考えられるのは、ボリスの父フェルディナンドが彼に与えた影響であろう。彼の父フェルディナンドは極めて親独的な人間であったからである。フェルディナンド一世は第一次大戦の時、祖国をドイツ陣営に参ぜしめた人であった。

## 十

ハンガリーはドイツとの友好関係に依って一番先に利益を得た国であった。ハンガリーはドイツの援助に依って、

第一次大戦後失った多くの領土を回復した。その結果ハンガリーはソ連との間に広い面にわたって国境を接するに至ったのである。斯くてソ連との関係はその対外関係において最も重要なものとなった。一九四〇年一月二〇日、ウィーンにおいて三国同盟参加議定書に調印するに当って、ハンガリーのテレキ首相は、ソ連とハンガリーとの間の友好関係を強調した。これは南東ヨーロッパにおいて行われた領土再編成後のハンガリー政府の政策であった。テレキ首相がどの程度三国同盟の非攻撃的な性格に信をおいていたかどうか疑問である。テレキは政府を率いる立場にあった人物の中で、最も矛盾に満ちた人物の一人であつたらう。彼は新しい世界戦争におけるドイツの敗北を確く信じていた。しかも彼は自国の歩む道として、三国同盟に参加する以外に道はないと思つていたのである。彼は英国やフランスに信を置いていなかったが、ブダペストを西欧文化の城壁たらしめんとしたのであつた。かれはソ連との戦争を恐れた。然し、彼は全心得てソ連を軽蔑していたのである。イヴァン・ラヨシュの「何故にドイツは今度の戦争に勝つ事が出来ないか」という本がテレキの承認を得たばかりでなく、その援助さえも受けてハンガリーで出版されたのである。その後、この本の販売は禁止されたが、ハンガリーの官吏は誰もがその内容を知つてしまつた。この混乱した矛盾の中に、パウル・テレキの悲劇の原因がひそんでいたのである。ハンガリーの閣僚達が、ハンガリーの三国同盟加盟をどの様に解釈していたかに関係なく、モスコフは事態を現実的に解釈した。ソビエト政府は、ハンガリーのこの潜在的な反ソビエト・ブロックへの参加に対して抗議した。常の如くこの抗議は外国新聞の報道を否定する形式で行われた。一九四〇年一月二三日、タスは次の如く報道した。ハムブルガー・フレムデンブラットに依ると、ハンガリーが日独伊三国同盟に加盟したのは、ソビエト政府の同意と承認を得て行われたことになっているが、これは事実と合致しない、と。然しながら、ドイツの政策に対しては一言の抗議も行われなかつた。<sup>77</sup>

ソビエト・ロシアとハンガリーとの間の通常関係は暫くの間続いた。そしてテレキはその自宅において、三国同盟加盟以前と同じく、普通に暮らしていたのである。三国同盟条約加盟の三週間後にハンガリーはユーゴスラヴィアとの間の友好条約に調印した<sup>⑧</sup>。ハンガリーの行為は、ハンガリーがその外交政策の独立性を維持せんとしたのだとも解釈せられたし、或いは又、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、トルコを含む新しい中立同盟の萌芽であるとも解釈せられた。ドイツはブダペストとベルグラードとの関係を奨励した。ドイツはかくすることによって、ユーゴスラヴィアの三国同盟への導入を企図したのである。自覚するとしないとにかかわらず、テレキ政府の立場は独ソ両国に対して背離的なものになって来た<sup>⑨</sup>。

一九四一年三月二七日にベルグラードにクーデターがあつた後、ユーゴスラヴィアとドイツとの間に戦争があるだろうという事は、火を見るよりも明らかであつた。ベルリンはハンガリーに対して公然たる軍事援助を求め事に決定した。枢軸国においてユーゴスラヴィアは、南東ヨーロッパにおける英国勢力の本拠であると思われていた。そしてそれ故に、ドイツとユーゴスラヴィアとの戦争は、その本質においてドイツと英国との戦争であつた。ソビエト政府は、ベルグラードの新政府に精神的な援助を与え、そのドイツに対する抵抗を増大せしめんとしていた。

三月の末、テレキは英国に対し、ハンガリーがいかなる事情の下においても、戦争にまぎ込まれる事はない旨言明した。然し、ドイツの圧迫は抵抗し難い程強いものになって来た。四月三日、テレキはハンガリー政府に、「我々の未来は絶望である」旨告げた後、自殺してしまつた<sup>⑩</sup>。四月六日、英国はブダペストとの外交関係を断絶した。翌日、ドイツはハンガリーの積極的な援助を受けてユーゴスラヴィアを攻撃した。この時、ハンガリーはロシアから突然攻撃される事を恐れて、ハンガリーの立場を急いでモスコウに弁明した。四月一二日にハンガリー使節は外務人民委員

会を訪問した。モスコーは既に新しいユーゴスラヴィア政府との間に友好条約を結んでいたのでハンガリー側の説明に対して良い反応は見せなかった。ヴィンスキークはハンガリー使節に対し、「ソビエト政府は今度のハンガリーの行為を承認する事は出来ない」旨を述べた。そして又、ユーゴスラヴィアとの友好条約を結んでから、四ヶ月しか経たないのに、既に此の様な行為に出たことは甚だ遺憾であると述べた。<sup>⑧</sup>これに対しブダペストはソビエト政府は事態を正確に認識していない旨反対声明を發した。ハンガリー政府は一九三九年にソ連がポーランドに侵入した時のと同じ口実を設けて、ユーゴスラヴィア国家が既にその存在をやめたのでハンガリー軍隊はユーゴスラヴィア内にいるその同胞の救助に赴いたのでであると述べた。ユーゴスラヴィア国家が消滅したので、ハンガリーはドイツとイタリーに包囲せられる事になった。斯くて、ハンガリーとソビエト・ロシアとの関係は極度に悪化したのである。

## 十一

ドイツのユーゴスラヴィアへの圧迫がはじまったのは、一九四一年二月のはじめであった。二月一四日にツヴェツコヴィッチ首相とマルコヴィッチ外相はヒットラーに招待されて、彼のバヴァリアの城を訪れ、そこで日独伊三国同盟への参加を求められた。二人はヒットラーに対して明確な返答はしなかったけれども、ヒットラーの提案に対して、充分な考慮を払う旨を述べた。

ユーゴスラヴィア政府はヒットラーからこの様な提案を受けた事を秘密にしておこうとしたが、それは忽ちにして國中に知れわたって人々を憤激させた。何故ならば、ユーゴスラヴィアの国民はその大部分が反独的であったからで

ある。然しドイツの圧迫は次第にその力を増し、ユーゴスラヴィア側の回避策もその効を奏さなかつた。ユーゴスラヴィア政府は三国同盟に公然と参加する代りに、ヒットラーに対して友好及び不侵略条約を提案した。英米政府はドイツの圧迫に対するユーゴスラヴィア側の抵抗を積極的に激励した。ソビエト・ロシアは英米とは別個に行動していたけれども、ユーゴスラヴィアがドイツを排斥すべく勸説し、そしてソビエト連邦との間に不侵略条約を締結する事を提案した。<sup>⑧4</sup> 独ソ両国と同時に不侵略条約を締結すれば、ユーゴスラヴィアの困難は一時除去せられるが如くに思われた。然し、ヒットラーはこの考えに反対したので、この計画は無に帰した。ユーゴスラヴィア国内における親ドイツ派と反ドイツ派の鬭争は次の二週間において激烈をきわめた。この間、イタリーはその軍隊をユーゴスラヴィア国境に集結した。遂にドイツは回答期限一週間の最後通牒をユーゴスラヴィアに発した。ユーゴスラヴィアはヒットラーの要求に屈し、一九四一年三月二一日、三国同盟に加盟する事を決定した。<sup>⑧5</sup> この決定はユーゴスラヴィア内閣の危機をもたらしした。幾人かの閣僚が辞職した。一九四一年三月二二日、ツヴェツコヴィッチは三国同盟条約加盟議定書に調印した。調印後、独伊両国は宣言を發し、両国は「いかなる場合でもユーゴスラヴィアの主権の尊重及び領土の保全を期する旨決意し、而して枢軸国は戦争中ユーゴスラヴィア政府からユーゴスラヴィア領内の軍隊の通過及び輸送の権利を要求しないことに同意した」旨述べた。<sup>⑧6</sup> かくて、ユーゴスラヴィアはその補償として、エーゲ海への出口及び全サラニカ地方を受けとる事になっていた。その代り、ユーゴスラヴィアはその軍隊の動員を解除することになっていた。この約束が一九四一年三月二七日夜のクーデターの直接原因であった。<sup>⑧7</sup> 新政府は慎重な政策を採用し、ドイツに対し融和政策にすら出たのである。シモヴィッチ將軍（新政府首班）はベルグラードの独逸使節に対し、



前内閣と枢軸国との協定の或る種の実行にうつすと、ユーゴスラヴィア国内に不安を醸成する旨信じこませようとした。そしてそれと同時に、独逸との間の友好関係の持続を希望し、枢軸国との公然たる協定は総べてこれを行行にうつす用意がある旨信じこませようとしていた。一方ユーゴスラヴィア内には愛国的な感情が次第に強まって行った。連日、愛国的な示威運動がベルグラードにおいて行われたが、そのうちのいくつかは共產主義者に依って組織せられていたもので、それらの示威運動は帝国主義者の英国及びドイツの両者に向けて行われたものであった。彼等はロシアとの間の条約を要求した。大体において彼等はロシアのバルカン政策を支持していた。当時ロシアはドイツのユーゴスラヴィア侵略に反対していたと同時に、ユーゴスラヴィアと英国との同盟にも反対していた。ロシアが同意すると思はれるただ一つの解決策は、ユーゴスラヴィアとソ連との間の直接協定であった。この協定の為の交渉が一九四一年四月三日モスコーにおいて開かれ、四月五日夜遅くなって、不侵略条約が調印された。此の不侵略条約に依って、両締約国は互いに侵略行為に出でざる事を約すると同時に、締約国のいずれかが第三国に依って攻撃される場合には、相互に友好関係を維持する旨約したのである。期間は五年で直ちに効力を発する事になって居り、批准は後日行われる事になっていた。⑧ロシアは又ユーゴスラヴィアに対して、武器を供給する事を約束した形跡が充分にある。然しながら、交渉を通じてロシアに依る直接的な軍事援助には触れられなかった様である。この条約締結はドイツがユーゴスラヴィアに進撃の意図をかためていた時に行われたので、その意味する所は明白であった。ヒットラーは直ちにこの挑戦を受けた。ソビエト・ロシアとユーゴスラヴィアの条約が調印されてから、数時間しかたない一九四一年四月六日の明方、ドイツの軍隊はユーゴスラヴィアの国境を越えた。モスコーのラジオはロシア国民にこの条約の締結を発表すると同時に、ドイツとユーゴスラヴィアとの間に戦闘行為が開始された旨報道した。

ユーゴスラヴィアとドイツとの間の戦闘は一日間継続した。ロシアも英国もアメリカもユーゴスラヴィアを援助するのに時間がなすぎた。ユーゴスラヴィアの軍隊の装備は余りにも貧弱であり、準備が殆んど出来ていなかった。ドイツ軍の怒濤の様な進撃を阻止する事は出来なかった。四月一七日にユーゴスラヴィア軍はドイツ軍に降伏した。ソビエト・ロシアはユーゴスラヴィアとの間の条約を短期間ではあるが、厳格に守った。数拾人のユーゴスラヴィアの航空兵がソ連の領土内に不時着したが、ソ連側から丁重な待遇を受けた。ソビエト政府はブダペストからユーゴスラヴィアの外交代表及び領事館員を輸送する為、ハンガリー国境に特別列車を送った。又、ベルリンからユーゴスラヴィアの外交代表がロシアに向った。然しながら、五月のはじめになると、ドイツとの間の友好的な諒解に到達せんとしていたクレムリンは、ユーゴスラヴィア亡命政権との交渉を拒絶した。<sup>⑧</sup>一九四一年八月一日になってようやく、ソビエト・ロシアの外務人民委員会スポークスマン、ソロモン・ロゾフスキーは、一九四一年四月五日のロシアとユーゴスラヴィアとの条約はいぜんとして有効であると声明した。然しながら、その頃までには国際情勢は完全に一変していたのである。

次に、トルコの情勢について一言することにしよう。<sup>⑨</sup>

## 十二

戦争の第二年がはじまると共に、トルコは鬭争の中心舞台となつて来た。北アフリカにおける戦争は何時近東における戦争に転化するかもわからなかつた。ドイツは西欧における戦争が急速度のうちに終つたので、南東ヨーロッパ

にその眼を向けた。斯くして、トルコはソ連・英国・独逸・イタリーの政治外交の交叉点となつて来た。アンカラとイスタンブールはヨーロッパ外交にとり重要な地点になつたばかりでなく、時には最も重要な地点になることになつたのである。陰謀、スパイ行為、風説はこれらの都市にあふれた。戦争当事国はトルコへ送る外交使節に非常に重要な考慮を払つた。ドイツはトルコへ極めて有能な外交官フランツ・フォン・パーペンを送つた。

ドイツが西欧において勝利した後、トルコがロシアとの接近をはかるだろうという事は容易に予想されることだつた。トルコはそれ迄約二〇年間ロシアと密接な關係を維持して来たのである。然し、トルコは最近におけるロシアの領土的欲望がはげしいのを見て、ロシアがカールス及びアーダハンの回復を求めることを恐れた。更にトルコはロシアがボスフォラス海峡制度の変更の為に、新しい要求を提出しはしないかと恐れた。ドイツはこの機会を狙つてロシアとその以前の同盟国との間の不和を更に拡大すべく努力した。一九四〇年七月一日に發表されたドイツ白書は、それより数ヶ月前にトルコ内閣において論じられた外務大臣サラコグルの反ソビエト計画を暴露した。アンカラ政府はソビエト代表のテレンチエフとパーペンとの間に密接な協力關係があるものと解釈した。アンカラの見解に依れば、フランス降伏後の独ソ兩國の目的は、トルコにとつての唯一の友好国である英国を打倒する事にあつた。

一九四〇年春においては、バルカンにおける現状維持を欲したのはドイツ側であり、ロシアは擴張計画をたてていた。ところが、秋から冬になると、今度はドイツが南東ヨーロッパにおいて急速に擴張しつつあり、トルコとロシアは現状の勢力均衡を維持するのに精一杯であつた。アンカラにおけるソビエト代表テレンチエフは、一九四〇年夏歸國し、それから四ヶ月間その地位は空いたままであつた。テレンチエフの後任にはセルゲイ・ヴィノグラドフがなり四ヶ月の空任の後、戦雲たちこめるトルコの首府に着任した。彼は直ちにトルコ首相セイダムと会見したが、それか

ら数時間後、アンカラのラジオはドイツ軍のルーマニア進駐を報道すると同時に、「二〇〇万の銃剣」がトルコへの道に充満するだろうと語った。トルコ使節カイダル・アクタイも長い間の空任の後、モスコへ帰任した。アクタイは本国の訓令に依り、ドイツ軍の黒海へ向つての進撃及び近すぎつつあるイタリーとギリシャとの闘争についてのソビエト側の見解を知ろうとした。その結果アクタイは、ロシアがバルカンにおけるドイツの侵略に対して軍事的に抵抗する意図のない事を知った。他方ロシアはトルコに対し、トルコが戦争にまき込まれた場合、赤軍が侵略的な行為には出ない旨約束する用意が出来ていた。然し、ロシアはそれ以上の約束をトルコに与える事を好まなかった。それにも拘らず、ロシア側が領土その他の要求を全然しないという事実が、両国の友好関係を形成するのに役立った。一九四〇年一月一日、トルコのイスメット・イネニユ大統領はトルコの国民議会において、「殆んど二〇年間の過去を持つ我々とソ連邦との信頼関係は、種々の困難を経験した後、再び通常の友好関係にもどつた。世界的な栄枯盛衰の只中であつて、ロシアとトルコとの関係はまことに価値あるものである」と演説した。かかる間にも、トルコは戦争の準備を着々とすすめていた。一九四〇年一月後半には、トルコの国中に非常事態が宣言せられ、都会においては連日燈火官制演習が行われた。何処においても、来るべき戦争に備えて真剣な準備が行われていた。

モロトフのベルリン訪問は独ソ間に全面的な了解を生ぜしめたのではないかという危惧を再びトルコに起させることになつた。若しも全面的な了解が生れるならば、それは近東の運命を決し、トルコとダーダネルスに大きな影響を及ぼすであろう。然しながらベルリン会談は既述の如く何等の結論にも到達しなかつた。ヒットラーの目的はロシアの注意を中央アジア方面にそらせつつ、ロシアを枢軸陣営に参加させることにあつたが、モロトフはトルコを全面的にドイツに引き渡してしまふ事に同意しなかつた。

モロトフの訪独が行われた直後、ヒットラーはパーペンをアンカラから召喚して、トルコに対するドイツの政策を検討した。ロシアが全面的な四国提携（日独伊ソ）を拒絶したので、ドイツの政策は今やアンカラと接近し、トルコとソ連との間に楔をうち込む事に変更せられた。アンカラに帰任すると、パーペンはトルコの外務大臣サラコグル®に對し、ヒットラーの新秩序に参加し、ドイツと友好関係を樹立する様勸説した。

ドイツは今やトルコにおいて精力的な宣伝を開始した。その宣伝は英国に對しては公然と反抗的であり、ロシアに對しては静かではあるが、悪意に満ちた宣伝が行われた。パーペンが此の方面において最初にうった手は、英国がロシアに對してダーダネルスを約束したという事を暗示する事であった。パーペンは又トルコに對して、ベルリン會談の時にモロトフがダーダネルスとボスフォラスに陸海軍基地を設ける事を要求したことを報知した。そしてドイツの大軍がブルガリアを丁度通過しつつあった時に、ヒットラーはトルコ大統領に對して個人的に手紙を送り、ベルサイユ條約以来のイギリス外交政策の奸計の歴史に注意を喚起すると同時に、ドイツ側としてダーダネルスに對するあらゆる要求を放棄し、更に密接なドイツとトルコとの協力を要望した。

トルコは今やジレンマに直面した。トルコはドイツと戦うべきか、或いは覚束ない中立ではあるが、あらゆる犠牲を払ってもトルコの中立を維持すべきであるか。トルコの軍隊は余りにもその裝備が貧弱であり、それに又トルコの唯一の強力な同盟国である英国は余りにも遠方であつて、効果的な援助を期待する事は出来なかつた。又ロシアから軍事援助を期待する事も出来なかつた。この点についてのロシアの態度は明瞭であつたのである。されば、当時においてトルコの歩み得た唯一の道は、一步一步後退してトルコの隣国であり同盟国であるブルガリア及びギリシャがドイツに併合されるのを許容する事であつた。一九四一年二月一七日に調印された協定においては、トルコとブルガリ

アは彼等の外交政策の「不変の原則としていかなる侵略行為にも出ない」旨宣言した。この協定は、たとえドイツがブルガリアを占領しても、トルコが戦はないことを意味した。これは明らかにヒットラーの目的と合致するものであった。ドイツは今やトルコの抵抗を恐れる事なしに、ブルガリアを占領出来る事になった。

トルコに対する英独の闘争が最もはげしくなったのは、一九四一年二月と三月であった。英国の軍隊がギリシャに上陸し、ドイツの軍隊が既にブルガリアに進撃していた頃、アンソニー・イーデンはギリシャへの軍事援助に関して、トルコとの間に或る種の了解に達したという風評が流れた。英国とギリシャとトルコとユーゴスラヴィアから成る新しい軍事ブロックが形成される様に思はれ、ソビエト・ロシアはこの新しい反独運動に慎重な祝福を送るが如くであった。然しながら、これらは実現するに至らなかった。ドイツがトルコを侵略しようとしているという噂が次第にひろまりつつあったイスタンブールに於ては、市民を避難させる準備が行われていた。三月の後半になると、ドイツ軍はブルガリアの占領を完了してトルコ国境に近接しつつあった。ヒットラーが若しもトルコを支配するならば、彼はコーカサスを制する事が出来るだろう。この事を懸念したロシアはトルコとの交渉を急いだ。ロシアとトルコとの交渉がモスコーにおいて行われている時に、サー・スタップフォード・クリップスがモスコーに到着し、この交渉を促進せしむべく努力した。ロシアはトルコに対し、若しもトルコが枢軸国との戦争にまき込まれた場合にはロシアは侵略行為に出ないこと、そして如何なる場合でも厳正中立を維持することを約した。モロトフはトルコ代表に対し、此の宣言を口頭で伝えた。これを公表してドイツを更に刺戟する事を恐れたのである。ポーランドの様に独ソ協定の犠牲となることを恐れていたトルコにとっては、ロシアのこの宣言はまことに有難いものであった。一方事態は益悪化して行き、ユーゴスラヴィアが三国同盟に参加して後は事態は益々危険になって行った。トルコはモスコーに対し、

不侵略宣言の公表を要求した。一九四一年三月二五日にソ連の外務人民委員会は次の様なコミニケを發表した。

外国新聞に流布されている風説によれば、トルコが戦争にまき込まれざるを得なくなつた場合、ソ連はトルコの困難を利用してトルコを攻撃するだろうと云われているが右に關し、その他の多くの質問に対する解答を含めて、ソビエト政府はトルコ政府に対し、次の如く通達済である。

(1) 此の様な風説はソビエト・ロシアの立場に合致しない。

(2) 若しもトルコが現実に攻撃を受け、その領土を防禦せざるを得なくなつたら、トルコは蘇土間の不侵略条約に基き、ソ連邦の充分なる了解と其の中立を期待し得る。<sup>④</sup>

トルコ政府はソビエト政府がなした此のコミニケの發表に対して充分なる感謝の意を表し、若しもソビエト政府が同様の立場に立つたならば、ソビエト政府もまたトルコの充分なる了解とその中立を期待する事が出来る、と述べた。然しながら、トルコのこの政策もバルカンに対するドイツの進出を阻止する事は出来なかつた。一九四一年四月一八日、ユーゴスラヴィアは無条件降伏、次いで四月二三日にはギリシヤが無条件降伏した。四月二五日にドイツとギリシヤの間に新通商条約が調印された。パーペンは更に前進し、トルコに対して友好条約を提案したばかりでなく、ドイツに依るトルコ国境の保障をさえ申込んだのである。日本の外務大臣松岡洋右がベルリンを訪問した後、ヒットラーはパーペンをベルリンに呼んで対土政策を協議した。五月の半ばにパーペンはイネニユ宛のヒットラーの手紙を持ってアンカラに帰任した。ヒットラーはこの手紙でトルコが英国と完全に手を切り、新秩序に参加する事を要求したが、トルコに対して何等特別な要求は提出せず、トルコの独立と主権は尊重する旨言明した。然し、アンカラはいぜんとして対英接近方針を変えなかつた。そしてヒットラーの提案を英国に通報したのである。

パーペンの努力はトルコとの間に友好条約を締結するまでには至り、ドイツは独ソ戦の場合におけるトルコの中立を保証される事を得たけれども、トルコを枢軸国の軍事ブロックに参加させ、斯くしてドイツ陸軍及び空軍がロシアを南方から撃つことを可能ならしめようとする努力には失敗した。一九四一年六月一七日に調印され、直ちに効力を発生した新独土条約には調印国間の相互討議の条項があったが、一方トルコはその英国との条約を廃棄しようとは思っていなかった。そしてドイツとの交渉過程においても、あらゆる現存協定はその効力を維持する旨が述べられたのである。サラコグルは英国に対して、トルコはいかなる状況の下においても、ドイツ軍隊がその領土を通過したり、又はドイツの武器がその領内を輸送される事を許可する事はないだろう、と通達した。従って独土条約は同盟というよりも単なる中立条約である。<sup>⑤</sup>

アンカラは新協定の中に反ソビエト的な要素が含まれている事に夙に気がついていた。一九四一年六月の半ば頃までには、ヒットラーの意図は隠し切れない程明瞭なものになっていた。ソ連は独土条約をトルコの陰謀と解したが、ソ連政府はこれに対して公然たる反応を示さなかった。斯くて、ドイツがソ連に対して宣戦を布告した時、トルコは再び自己の中立を再確認した。独英及び独ソの両戦争に対するトルコの態度は、独英戦争に対しては非交戦国、独ソ戦争に対しては局外中立であった。当時のロンドン・タイムズの記者の推測に依ると、当時のトルコ人は独英戦争に對しては、四分の三までが英国の勝利を望むだろうが、独ソ戦争に對しては、トルコ人は総べて独逸の勝利を望むだろうという事であった。「トルコ内における感情は、親独ではないけれども反ソであることは確かである」<sup>⑥</sup>。

一九四一年七月、パーペンはトルコ政府に對して、トルコ政府が独英戦争に對して居中調停の役を買って出る事を提案した。即ち英国がロシア援助の手をゆるめ、ヨーロッパがドイツの支配下に留まることを英国が認める様英国に



勸説せよ、というのである。ドイツとの交渉を拒絶した英国は、トルコがそれ以上独逸に接近しない様制止した。トルコは小国ではあったけれども、その地の利に依って、その帰趨如何では全戦局をドイツ側に有利に展開させることも可能であったのである。

## 註

- ① 大戦の秘録、読売新聞社、昭和二年、三三四頁。猶ほ同書三三五頁の最初の行にこの電報の受信日時として、一九四〇年一月二六日午前八時五〇分とあるのは、一九四〇年一月二六日午前八時五〇分の誤りである。Die Beziehungen zwischen Deutschland und der Sowjetunion, 1939-1941, Dokumente des Auswärtigen Amtes Herausgegeben von Dr. Alfred Seidl, 1949, H. Laupp'sche Buchhandlung Tübingen, S. 296.
- ② 大戦の秘録、同上、三三八頁。
- ③ 近衛文麿、平和への努力、日本電報通信社、昭和二年、二二頁。
- ④ 日独伊三国同盟成立の経緯については、雑誌世界昭和二五年十一月号の高木惣吉氏の論文参照。
- ⑤ 「アメリカはヨーロッパ、アフリカ及びアジアには何も用事はない」とヒットラーは一九四〇年十一月十二日のモロトフとの会談で述べている。
- ⑥ 大戦の秘録、前掲書、二八九・二九〇頁。
- ⑦ J. B. Duroselle, Histoire Diplomatique, de 1919 a nos jours, 1953, Dalloz Paris, p. 333.
- ⑧ 大戦の秘録、前掲書、三三三、三三四頁。
- ⑨ 同右、三三四頁。
- ⑩ 同右、二九四頁。
- ⑪ 同右、二九四頁。
- ⑫ 同右。

- ⑬ 同右、二九九頁。
- ⑭ 同右、三三五頁。
- ⑮ 東郷茂徳、時代の一面、改造社、昭和二十七年、一三三頁。
- ⑯ David J. Dallin, *Soviet Russia's Foreign Policy, 1939-1942*, 1945, Yale Univ. Press, p. 341.
- ⑰ David J. Dallin, *op. cit.*, p. 342.
- ⑱ Dallin, *ibid.*
- ⑲ *ibid.*
- ⑳ Max Beloff, *The Foreign Policy of Soviet Russia, 1929-1941*, vol. 2, Oxford University Press, 1949, p. 370.
- ㉑ Max Beloff, *ibid.*
- ㉒ D. J. Dallin, *op. cit.*, p. 340.
- ㉓ M. Beloff, *op. cit.*, p. 370.
- ㉔ D. J. Dallin, *op. cit.*, p. 340-341.
- ㉕ Dallin, *op. cit.*, p. 341.
- ㉖ Dallin, *op. cit.*, p. 342.
- ㉗ Dallin, *op. cit.*, p. 339.
- ㉘ Dallin, *op. cit.*, p. 339-340.
- ㉙ Dallin, *op. cit.*, p. 339.
- ㉚ 西園寺公一著、貴族の退場、文藝春秋新社、昭和二六年、七九頁。
- ㉛ 東條英機、宣誓供述書、昭和三年、洋々社、二七頁。
- ㉜ Frederick L. Schuman, *Soviet Politics, at home and abroad*, New York, 1949, p. 411.
- ㉝ M. Beloff, *op. cit.*, p. 374.
- ㉞ 大戦の秘録、四二二頁。
- ㉟ M. Beloff, *op. cit.*, p. 374.

- ④⑧ Beloff, op. cit., p. 375.
- ④⑨ Beloff, op. cit., p. 377.
- ④⑩ Beloff, op. cit., p. 380.
- ④⑪ J. B. Duroselle, op. cit., p. 334.
- ④⑫ Dallin, op. cit., p. 201.
- ④⑬ Dallin, op. cit., p. 202-203.
- ④⑭ Dallin, op. cit., p. 203.
- ④⑮ J. B. Duroselle, op. cit., p. 330.
- ④⑯ Duroselle, op. cit., p. 331.
- ④⑰ Duroselle, op. cit., p. 331.
- ④⑱ Dallin, op. cit., p. 208.
- ④⑲ Dallin op. cit.
- ④⑳ ノーカスミヤノブチハノミロウマキブノルーマニアの同盟 cf. Dallin, op. cit., p. 202.
- ④㉑ Dallin op. cit., p. 238-239.
- ④㉒ Dallin, op. cit., p. 239.
- ④㉓ Ernst von Weizsäcker, *Erinnerungen*, 1950, S. 299.
- ④㉔ Dallin, op. cit., p. 262.
- ④㉕ Dallin, op. cit., p. 263.
- ④㉖ J. B. Duroselle, op. cit., p. 321.
- ④㉗ Dallin, op. cit., p. 263.
- ④㉘ Dallin, op. cit., p. 266.
- ④㉙ Dallin, op. cit., p. 267.
- ④㉚ Dallin, op. cit., p. 273.

- ①⑧ 大戦の秘録、三一九頁。
- ①⑩ Dallin, op. cit., p. 274.
- ①⑨ Dallin, op. cit., p. 276.
- ②⑧ Dallin, op. cit., p. 278.
- ②⑨ Joseph S. Rouseck, *Balkan Politics, international relations in no man's land*, Stanford University Press, 1948, p. 64.
- ③④ Dallin, op. cit., p. 280.
- ③⑤ Dallin, op. cit., p. 281.
- ③⑥ ブルガリアの人民は全体として同じスラヴであるロシア人に同情している。ブルガリアには歴史的、言語的、社会的にロシアに対する同情が流れている。 cf. S. Rouseck, op. cit., p. 64.
- ③⑨ Dallin, op. cit., p. 282.
- ③⑩ Dallin, op. cit., p. 283.
- ③⑪ ibid.
- ③⑫ Dallin, op. cit., p. 284.
- ③⑬ Dallin, op. cit., p. 285.
- ③⑭ ibid.
- ③⑮ Dallin, op. cit., p. 286.
- ③⑯ ibid.
- ③⑰ S. Rouseck, op. cit., p. 63ff.
- ③⑱ Dallin, op. cit., p. 298.
- ④① ibid.
- ④② Dallin, op. cit., p. 299.
- ④③ ibid.
- ④④ Dallin, op. cit., p. 300.

- ⑫ ibid.
- ⑬ Premier Cvetkovich, Dallin, op. cit., p. 301.
- ⑭ Cincar-Markovich.
- ⑮ Dallin, op. cit., p. 302.
- ⑯ ibid.
- ⑰ Dallin, op.cit., p. 303.
- ⑱ ibid.
- ⑲ Dallin, op. cit., p. 304.
- ⑳ Dallin, op. cit., p. 305.
- ㉑ The Middle East in the War, by George Kirk, with an introduction by Arnold Toynbee, Oxford University Press, 1953, p. 443ff. Dallin, op. cit., p. 305ff.
- ㉒ the province of Kars and Ardahan.
- ㉓ President Ismet İnönü.
- ㉔ Saracoglu.
- ㉕ Dallin, op. cit., p. 311.
- ㉖ Dallin, op. cit., p. 313.
- ㉗ Dallin, op. cit., p. 314.

